

# デンマークの就学前教育機関におけるペダゴゴの役割

山浦祐香<sup>1</sup>・是永かな子<sup>2</sup>

(<sup>1</sup>高知大学教職大学院・<sup>2</sup>高知大学教育研究部人文社会科学系教育学部門,高知ギルバーグ発達神経精神医学センター)

The Role of 'Pædagog' in Pre-School Educational Institutions in Denmark

Yuka Yamaura<sup>1</sup> and Kanako Korenaga<sup>2</sup>

*<sup>1</sup> Programs for Advanced Professional Development in Teacher Education, Graduate School of Integrated Arts and Sciences, Kochi University, <sup>2</sup> Research and Education Faculty Humanities and Social Science Cluster Education Unit · Kochi Gillberg Neuropsychiatry Centre*

**Abstract :** In this study, we investigated the specialties and roles of 'pædagog' in Denmark at pre-school educational institutions and the specialties and roles of 'pædagog' during the transition support from pre-school educational institutions to school.

First, as for the role of 'pædagog' at pre-school educational institutions is mainly to supervise activities such as playing and social skills. Such activities will develop children and their social skills, support personality and human relationship formation. The 'pædagog' teach and give the children common social knowledge opportunities necessary for the growth of children.

'Pædagog', a person who works at a pre-school educational institution, provides support that suits the child's developmental stage. In addition, their teaching and support maximizes children's abilities with childcare plans in their mind. They also provide support so that children can recognize their self-affirmation and values. Because of this, the 'pædagog', are considered to have expertise in supporting social skills, psychological fields and teaching and supporting in consideration of social and future awareness of children with the child's developmental stage in mind.

Secondly, the 'pædagog' specialization at the time of transition to school from preschool education is to consider children's interests most at the same time they support the children who are thinking about the school they will go to. Also the 'pædagog' think about activities that would link pre-school educational institutional learning to school learning in order to reduce children's anxiety and concerns about school.

キーワード : デンマーク ペダゴゴ 就学前教育機関

Key words: Denmark, 'Pædagog', Pre-School Educational Institutions

## 1. 問題の所在と研究の目的

デンマークの就学前教育の特徴は、幼稚園・保育園は社会省が管轄する就学前教育機関に一本化され<sup>1</sup>、学校入学後も就学前学級 0 年生という学年から始まることである。就学前学級では、主としてペダゴグ(Pædagog)が指導を担当し、義務教育学校である国民学校の教員も指導に参加する。就学前教育機関や国民学校等で働くペダゴグは、保育士資格や生活指導員資格を意味しており、この資格を習得するためには、専門大学で 3 年半課程を修了しなくてはならない<sup>2</sup>。ペダゴグの多くは就学前教育機関、義務教育学校としての国民学校の就学前学級、低学年や特別学校で勤務していることが多い<sup>3</sup>。

デンマークの就学前教育では、子どもが遊びを通して学ぶことを重視しており、就学前学級においても遊びながら学習準備をすることが尊重されている<sup>4</sup>。就学前教育機関は、子どもの将来の教育機会の基礎となる重要な時期として認識されている。就学前教育機関の指導要領を規定することや、就学前学級を国民学校 1 年へスムーズに移行するための準備期間として位置づけること、遊びの中にアルファベットや計算の練習を取り入れるなどの移行支援を重視する傾向があることが近年示されている。さらに学習面だけでなく、子どもの社会性を養うという面からも、早期から同年齢の子どもと生活することがよい影響を与えるとも考えられている。デンマークの就学前教育機関は、子どもの様々な能力を発達させるための場として認識され、「子どもを中心に」というスローガンをもとに活動が行われている。それは、就学前後の時期を子どもの発達の重要な時期と捉えた考え方に基づいているといわれる<sup>5</sup>。デンマークの保育制度は、保育形態によって①デイナースアリー、②デイケアセンター、③年齢統合保育所、④ファミリーデイケア、⑤プリスクールに分けられる<sup>6</sup>。

またデンマークの就学前教育内容について、ペダゴグは子どもとの対話を重視していたり、自己の価値、自分の存在を肯定する感覚としての子どものセルヴェア(Selvværd)を重視して、評価したりしていることも特色である<sup>7</sup>。デンマークにおいて、多くの子どもが 6 カ月から 2 歳までは保育所(または保育ママ)、3 歳児から 5 歳児では就学前教育機関に通っている。就学前学級は、遊びや他の子どもとの共同活動を通じて学校生活への準備を行う。また就学前教育機関では、そこでの生活を今まで家庭にいた子どもが初めて経験する「社会生活」として捉え、自由と自己決定の精神の下、遊びを通して人とのコミュニケーションの取り方、社会性を学ぶことを主な教育内容としている。また、遊びが主体となっていた環境から学校という授業による教科学習主体となる環境に慣れるため、入学前から就学前学級として国民学校に通い始めることで新しい生活の準備がなされる。

就学前教育機関におけるペダゴグの役割は国民学校の役割とは異なっている。子ども中心の就学前教育において、大人の要求がないほうが子どもの発達がよいということや、自分の権利を学ばせることにおいて、子どもがただ家族や性別や民族などによって決められているというのではない。子どもの実態は彼ら自身の理解や生活の中で発見されなければならないこと、子どもを社会的演技者として理解することにおいて、大人の国有化した社会の中にいるだけでなく、自分の生活状況に影響を及ぼし、積極的に周囲の環境を変えることに参加すること、子どもの視点と人生の解釈を尊重することにおいて、ペダゴグに、子どもたちの間で何が起るのかという特別な興味関心をあたえ、子ども自身の文化をどのように位置づけるかということが重視されている<sup>8</sup>。

さて、これまでに実施したデンマークのペダゴグの役割についての分析では、ペダゴグ養成での特徴としての「感覚科目」に注目すると、ペダゴグの専門性の一つは子どもの「感性を豊かにする」ことが明らかになった。教員とペダゴグの役割分担としては、教科指導は教員が担当し、生活指導(スポーツ・工芸・手芸など)や放課後の余暇指導はペダゴグが担当している。結果的にどの子どももより良く生活することを指導する役割がペダゴグの専門性の一つであると考えられる<sup>9</sup>。

以上をふまえて本論文では、デンマークの就学前教育機関におけるペダゴグの役割と施設学校間の引継ぎや移行支援体制に関して 2018 年 12 月から 2019 年 3 月に現地調査を実施した Brøndby 自治体(Brøndby kommune)、Frederiksberg 自治体(Frederiksberg kommune)、Roskilde 自治体(Roskilde kommune)のそれぞれの就学前教育機関を分析することとし、その実相を明らかにすることを目的とした。

## 2. 研究の方法

本研究では聞き取り調査と文献検討を行う。分析する自治体はデンマークの Brøndby 自治体, Frederiksberg 自治体, Roskilde 自治体とした。

Brøndby 自治体の 2018 年の人口は 35,538 人,面積は 20,85km<sup>2</sup>である。Brøndby 自治体はコペンハーゲンの郊外にあり,Brøndbyøster (BrøndbyNord を含む),Brøndbyvester,BrøndbyStrand の 3 地域で構成されている。Brøndby IF のサッカーチームが有名である。すべての公共施設で全面禁煙を実施したデンマークで最初の自治体である。

Brøndby 自治体において,聞き取り調査を行ったのは 2019 年 3 月 11 日 10 時 00 分から 11 時 30 分,訪問先は就学前教育機関 Brøndbygård børnehus(Toftager 42, Brøndbyvester)である。聞き取り調査対象者は年中クラスと最年長クラスのペダゴグであり,ペダゴグの専門性について聞いた。

Frederiksberg 自治体は,2017 年の人口は 105,037 人,面積は 8.71 km<sup>2</sup>である。Frederiksberg 自治体はコペンハーゲン市に囲まれた飛び地であり,独自の市長および市議会を擁し独立している。

Frederiksberg 自治体において,聞き取り調査を行ったのは 2019 年 3 月 26 日 11 時 00 分から 12 時 30 分である。訪問先は就学前教育機関 Børneinstitutionen Mariendal(Dronning Olgas Vej 6, Frederiksberg)である。聞き取り対象者は,本機関の長であり,ペダゴグの専門性と引継ぎ,移行支援について聞いた。

Roskilde 自治体は,デンマークのシェラン地域にある都市であり,デンマーク国内で 10 番目に大きい都市である。世界遺産に登録されたロスキレ大聖堂がある。2016 年の人口は 50,046 人,面積は 211.99 km<sup>2</sup>である。シェラン島の北部にあり,ロスキレ・フィヨルドの最奥に位置している。

Roskilde 自治体において,聞き取り調査を行ったのは 2019 年 1 月 4 日 9 時 00 分から 10 時 30 分であった。訪問先は就学前教育機関 : Mariehoj(Mariehoj,Roskilde)である。聞き取りの時間がなかったため,観察のみである。

## 3. 結果

### 3. 1. Brøndbygård børnehus 就学前教育機関

以下が,Brøndbygård børnehus 就学前教育機関における調査結果である。

表 1 Brøndbygård børnehus 就学前教育機関訪問調査結果

<ul style="list-style-type: none"> <li>・児童生徒数：一クラスあたり,最年少クラス 12-13 人,中間・最年長クラスは最高 25 人まで,現在は平均 22,23 人</li> <li>・職員数：一クラスあたり,最年少クラス 4 人 中間クラス 3 人 最年長クラス 2 人 のペダゴグ</li> <li>・日々のスケジュール： <ul style="list-style-type: none"> <li>6:30 から 17:00(金曜日は 16:30)で活動。毎週,毎日スケジュールが変わるので決まったものはない。就学前クラスの内容として,数や文字を就学に向けて学習しているが,外や部屋の中でたくさん遊ぶこと(写真 1)を主な活動内容にしている。友達にいい言葉がけをするというようなソーシャルスキルの学習もしている。(写真 2)また,週に 1,2 回読み聞かせをしていて,物語や歴史についても本から学びにつなげている。</li> </ul> </li> <li>・様子や特色： <ul style="list-style-type: none"> <li>6 か月から 5-6 歳の子どもが就園していた。クラスは大きく 3 つに分かれていて,0-2.5 歳の最年少クラス,2.5-5 歳の中間のクラス,5-6 歳の最年長クラスで分けられている。活動によって細かくグループ分けもされる。広場があって,焚火場もあった。年齢によって遊ぶ広場も区別されていて,広場の遊具は子どもにとって少し挑戦が必要なつくりになっている。デンマークのほとんどの施設には遊具はある。森も近くにあつて,たまに出かけて森で時間を過ごすこともある。</li> <li>最年少のクラスでは,何時に子どもが起きたか記すボードがあつて,それによって昼寝の時間を決めていた。また,寝るときは,気温が 0 度以上では外で昼寝をする。できる限り新鮮な空気に接することができる室外で寝かせている。乳母車で子どもが寝るときには子どもが自分ではしごを使って登っていた(写真 3)。ペダゴグはそれをサポートする。サポートははしごを支えているだけのときもある。機関外に出るときの支度も子どもは自分でする。どの年齢も</li> </ul> </li> </ul>
---

自分で身支度をする大切さは変わらない。一年、毎日の積み重ねが学校生活にもつながっている。  
 国民学校では保障されていない給食がほとんどの就学前教育機関では保障されている。

このように、この就学前教育機関に決まったスケジュールは無く、子どもの実態や興味のあることから、活動を決定したり提案したりしていた。

年齢に応じて 3 つのクラスに分けられていたが、遊び場や遊具も最年少クラスとその他のクラスで分けられており、子どもの発達段階を考慮して「子どもがチャレンジできるもの」になっていたことが特徴であった。最年長クラスの就学に向けての活動内容として、数や文字を学習しているようであった。しかし、今の年齢では、屋外・屋内でたくさん遊ぶことが子どもたちには最も重要なことである。友達にいい言葉がけをするというソーシャルスキルの学習や読み聞かせなどを通して、学びにつなげていた。

表 2 Brøndbygård børnehus 就学前教育機関のペダゴギーの専門性についてのインタビュー結果

Q1 ペダゴギーが大事にしていることは何ですか

回答者：最年長クラス担当ペダゴギー

学校につなげるために、国民学校はどんなところなのかを教えている。また、国民学校でも今の学びを思い出すことができ、不安がなくなることをめざしている。友達と遊ぶこと、友達と話すこと、外で遊ぶことなど、どんな時でも子どもは学んでいると考える。子ども同士の関係性やかかわりを大切にしている。主に意識して教えていることとしては、ソーシャルスキルである。

回答者：中間クラス担当ペダゴギー

セルフヘルプ、つまり子どもが一人でできるようになることである。子ども自身、自分が何を感じているか気づくこと、自分でわかることやソーシャルスキルを促している。個人も大切であるし、集団で生活しているということを意識するよう促している。子どものやりたいことを私たちはサポートしている。

Q2 ペダゴギーの専門性は何であると考えますか

回答者：最年長クラス担当ペダゴギー

ペダゴギーは、ソーシャルスキルに関する専門性が有り、教員は、ソーシャルスキルと学習に関する専門性がある。

Q3 配慮の必要な子どもへの支援方法や、個別の支援計画・指導計画の書き方を教えてください

回答者：最年長クラス担当ペダゴギー

障害のある子どもには個人の指導計画を作成していて、3か月ごとに新しい目標を立てる。

Q4 就学時の引継ぎの制度や仕組みについて

回答者：最年長クラス担当ペダゴギー

引継ぎの際には、子ども一人ひとりのデータファイルが作成される。内容は、子どもの基本的データや得意なこと、仲のいい友達、家族の絵やいろいろな線のパターンを書いていくような資料である。必ず保護者と協議して作成する。就学前教育機関のペダゴギーは国民学校就学後に学校に参観に行き、国民学校の教職員も就学前教育機関での子どもの様子を見に行く。

このように就学前教育機関においてペダゴギーは、遊びやソーシャルスキルなどの活動を中心として指導する。子どもの発達段階に合わせて、就学前教育機関における遊び場や遊具も工夫されていた。単に国民学校就学に向けてではなく、日々の積み重ねが次の場所、次の社会につながっていくというペダゴギーの聞き取り調査の回答から、子どもが社会の一員であることを意識して、将来の子どもの姿を考えていると思われる。就学に向けての活動では、国民学校入

学後に困らないようにというよりは、子どもの心配をなくすために、数や文字について指導していた。現在の学びも次の段階につながるように意識した活動を考えているようであった。



写真 1 遊ぶ子ども

写真 2 友達にいい言葉がけをしよう活動 写真 3 昼寝のために乳母車に行く子ども

### 3. 2. Børneinstitutionen Mariendal 就学前教育機関

表 3 Børneinstitutionen Mariendal 就学前教育機関訪問調査

児童生徒数：保育所(10 カ月から 2 歳)25 人,幼稚園(3 歳から 6 歳)60 人

職員数：合計で 10 人のペダゴゴ,6 人アシスタント(正規職員は,週に 37 時間勤務で,8:00~18:00 の間で調節)

日々のスケジュール：

集団や学級によって様々な活動を行っている。主な活動内容としては、音楽・身体活動・美術(絵を描く/塗る)・絵本読み聞かせ・野外活動・製作活動などのワークショップ,である。

様子や特色：

施設の建物は 3 階建てであり,1 階が保育所,2 階が幼稚園にあたる子どもが活動していた。訪問した時間が昼食の時間であったため,子どもは給食を食べていた。壁や通路に子どもが作った作品や写真がたくさん貼られていた(写真 5)。ペダゴゴの部屋には,各部屋に鏡が配置されていた(写真 4)。鏡の配置について尋ねたところ,子どもにとって自分の姿を見るのはとても大切なことであると指摘された。保育所の階には 2 クラスあり,それぞれ 12 - 13 人の子どもに対して 3 人のスタッフがサポートしていた

幼児の階では,30 人ほどが同じ部屋で昼食を食べていたり,6 人の小集団で昼食を食べていたりしていた。また,約半分の幼児は,森の幼稚園に行っていて,14 日ごとに就学前教育機関と交代して森に行っているようだ。3 か月ごとに活動のテーマが決められており,訪問時は,自然と科学であった。5 週に 1 回テーマ設定の機会があり,さらに曜日ごとに何の日か決められている(例えば,感覚の日・絵の日・運動の日・読み聞かせの日・散歩の日)。それに沿ってペダゴゴは,活動の概要を考えるが,子どものやりたいように任せていて,寄り添う姿勢でいるようだ。

またこの園では,記録活動を大切にしているようで,ビデオや子どもが言ったことを記録して,保護者に伝えるようにしている。この施設は,レッジョエミアから影響を受けている。子どもたちの作品などを本にまとめたり,年に一度全員に配ったりしている。これを振り返ることも,子ども自身の評価や,学んだことを思い出すきっかけになっているとのことであった。年に一度美術の講師の先生も招いているようである。

この就学前教育機関では,子どもの感覚を大切にレッジョエミア方法を取り入れていた。12 - 13 人の子どもに対して 3 人のスタッフがサポートにあたり,1 階が乳幼児を対象とした保育所集団,2 階 3 歳以上を対象とした幼稚園集団が活動していた。コペンハーゲンの街中にある施設のため,14 日交代で半分の子どもは,森で活動していた。就学前教育施設の学習計画があり,5 週に 1 回テーマを変えて活動が構成されていたことも特徴的であった。特にこの

就学前教育機関では、芸術に特化し、子どもが自分の行った活動を振り返るように、作品やペダゴアの記録活動に力を入れている。

表4 Börneinstitutionen Mariendal 就学前教育機関のペダゴアの専門性についてのインタビュー結果

Q1 ペダゴアが大事にしていることは何ですか

回答者：園長

大切にしていることは、①子どもが自立するような活動を行うことであり、子どものできることを増やし、学んだり成長したりするための機会をできるだけ多く与えられるように考えている。②子どもと同じレベルで、同じ目線に立って話すこと (“Talk with children”)。③子どもに価値を与えるということであり、年に一度の本の制作や作品を飾ることで、何を学んだかわかるようにしている。ノートに子どもの言葉を書くこともこれにつながっていく。

回答者：乳幼児クラス担当ペダゴア

最年少のクラスであるので、常に子どもの気持ちを読み取ることが大切にしている。一人ひとりという時間を作ったり、長く子どもと接したりするようにしている。

Q2 ペダゴアの専門性は何であると考えますか

回答者：園長

ペダゴアは、ソーシャルスキルを教えている。具体的には①対話、②ペダゴアと子ども間もちろん、子ども同士の良い関係を築くこと、③感じたことや感情の表現の仕方、④違いを知ること、子ども一人ひとりに個性があってお互いに違うことを理解すること、⑤正しい質問をすること、これらを大切に活動していて、これがソーシャルスキルにつながっている。

エピソードとして、②に関してけんかをした子どもがいて、一人は泣き続けていたが、もう一人は「ごめん」と謝ったからいいとどこかに行ってしまったことがあった。謝ることは大事であるが、まだ泣いている友達がいる。それをほっとくのは、解決になっていないことを教えた。多くの状況から学ぶことはたくさんある。

③に関して、怒りの感情を外にすぐに出してしまう子どもがいた時に、イライラするからといってモノにあたったり、人にあたったりしたら、他の友達と遊べなくなること、言葉で表現することや他の方法で対処をするやり方を教えた。特に気持ちなどは、どのように言葉で表すか、どのように伝えるかを大切に扱っている。

回答者：乳幼児クラス担当ペダゴア

ペダゴアとは社会生活指導員もしくは **social educator** と呼ばれていると考える。ペダゴアは、幼稚園・保育所のような日中サービス、障害者施設や作業所、老人ホーム、学童保育(SFO)、国民学校の 0 年生や低学年で活動していて、日本の保育士のスキルも含まれている。教員と比べるとペダゴアは、社会性の部分や放課後支援、アシスタントの役割がある。教員は教科の印象が強い。しかし、チームでともに指導している。また、ペダゴアアシスタントという職業もある。

Q3 配慮の必要な子どもへのアプローチの仕方や、個別の支援計画・指導計画の書き方を教えてください

回答者：園長

現在、配慮の必要な子どもはこの園に就園していないが、就園している場合は、構造化するなど個別でどのように支援するか考える。保護者と良い関係を築くことも大切である。また、今年度は、2 人の男の子がもう一年就学前教育機関就園を延長することになる。スタッフが毎日子どもの様子を見ていて、国民学校に入学するのはまだ早いと判断した場合、就学予定の国民学校の教職員と話をしたり、地区教育行政担当者に報告して、保護者に就園機関の延長が提案されたりする。しかし、最終決定は保護者が行う。

## Q4 就学時の引継ぎの制度や仕組みについて

回答者：園長

園にいられるのは、卒園の4月末までである。5月から8月は学童保育(SFO)の施設に行く。3月には、就学前教育機関のペダゴギーは国民学校を訪問する。次の学年や移行期には、橋渡しがうまくいくように意識している。子どもの引継ぎ資料としては、全員に「voice of child」という資料を作成しており、子どもの好きな食べ物などの質問を子どもにして、子どもの答えをまとめた資料が学校に送られる。

## Q5 就学に向けた取り組みについて、就学前教育機関では何をしていますか

回答者：園長

特に文字や数を教えるということはしていない。もし子どもが名前を書きたいと言ったら教える。日々の活動の中で目的を決め、子どもが興味を示しそうな物を用意し、そこからさまざまな学びにつなげている。最近では、「木」について扱った活動があって、木はどこから水を飲んでいるのか、でもおしっこは出てないね、というやり取りがあった。実際の物から多くを学び取っている。

上記のインタビューから保育の中で重視されている考え方は以下の通りであると考察した。①子どもはユニークな個人として認められており、ペダゴギーは子どものそのままの姿を受け入れる。②ペダゴギーは子どもと同等な位置に立って話をする。③子どもの興味や関心が大切にされ、やりたいことを追求できるように配慮する。④子どもがいろいろな遊びに挑戦できるよう配慮する。⑤子どもの人格形成、人間関係形成を重視しており、自分を良く知り、自分自身が好きな子どもに育つように指導する。⑥子どもはそれぞれ異なる興味や関心を持っていることを原点にしており、複数の活動が同じ場所で行われるように配慮する<sup>10</sup>。これらがペダゴギーの専門であると考えている。



写真4 教室の様子



写真5 階段に貼られていた子どもの作品



写真6 子どもの自画像

## 3. 3. Mariehøj 就学前教育機関

表 5 Mariehøj 就学前教育機関訪問調査結果

児童生徒数：一クラス約 10 人

職員数：ペダゴグが 2,3 人

様子や特色：

0 から 3 歳の子どもが就園していて、最年少は 10 カ月であった。朝 9:00 頃訪問したが、食事の時間で、調理室から子どもがご飯を当番制で運んでいた。4 人の子どもに対して 1 人のペダゴグが食事の手伝いをしていた。赤ちゃんの会話をわかりやすくするハンドサインの掲示があった(写真 9)。外に乳母車(KRYBBE)があり、一人一台準備されていた。自然の空気に触れさせるため、2 歳まで乳母車を使って外で寝かせる(写真 7)。一人一つのロッカーが準備されて、それぞれに子どもの写真が貼られていた。ロッカーには、寝るときに人形が必要な子やおしゃぶり(SUT)が必要な子の表示もされていた。聞くこと、見ること、触ることで子どもたちは外界を理解することを重視していた。子どもの目線に、保護者が作った画用紙の家が貼られていて、子どもや保護者の家での写真がその中に貼られていた(写真 8)。自分の写真を見ることはとても大切であるペダゴグが指摘していた。園内に保育プラン(PAEDAGOGISKE LAEREPLANER)が掲示されていた。この内容はそれぞれの就学前教育機関で独自に変更する場合もある。

掲示されていた保育プラン(PAEDAGOGISKE LAEREPLANER)の項目

- 1, 子どもの多様な発達
- 2, 社会的スキル
- 3, 言語
- 4, 身体と動き
- 5, 自然と自然現象
- 6, 文化的な言葉と価値



この就学前教育機関には、最年少で 10 ヶ月の子どもがおり、全体では 0 歳から 3 歳の子どもが就園し、1 クラス約 10 人の子どもを 2,3 人のペダゴグが担当していた。特に、聞くこと、見ること、触ることで子どもは外界を理解することや、子どもが自分の写真を見ることはとても大事なことなどをペダゴグが指摘していた。

保育プランは、2008 年 8 月 26 日に告示された「ソーシャルサービス法 8 条」の第 2 条に、①子どもの全面的な人間形成・個の確立、②人間関係・社会能力、③言葉、④体と動き、⑤自然と自然の現象、⑥文化的表現方法と価値という 6 つの項目が示されており、この項目ごとに保育計画としての「学びのプラン」を作成することが示されている<sup>11</sup>。

この就学前教育機関で以前勤務していた Eva Svendsen さんにもインタビューの機会を得た。ペダゴグは生活支援を可能にするために、例えば心を開いて接触(正直)、感情移入(共感)、寛容(忍耐)、思いやり、創造性、相手に安心感を持たせる等のスキルの専門知識を持たなければならない。就学前教育機関は学校と同様に子どもの成長と社会性の育成のために必要と考えられており、就園期間中に子どもの成長に必要な社会常識などを教えている。そのため就学前教育機関には専門的に教育されたペダゴグが必要である。就学前教育機関では、特に子どものより良い発達の方法であったり、ソーシャルスキルに重点が置かれていたりする。ペダゴグの専門性は、子どもがより広い社会に出てから、よりよく生活するための指導力である、と。



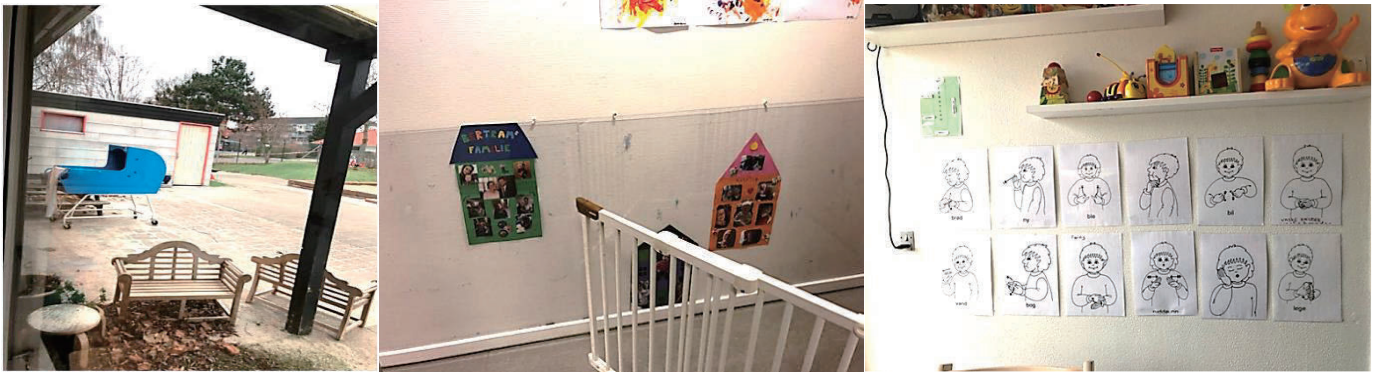


写真 7 外にある乳母車

写真 8 家族との写真

写真 9 子どもの発言を助けるサイン

#### 4. 総括

本稿では、就学前教育機関におけるデンマークのペダゴーの専門性と役割、就学移行の際のペダゴーの専門性と役割についての観点から調査を行った。

まず、就学前教育機関におけるペダゴーの専門性としては、就学前教育機関においては、遊びやソーシャルスキルなどの活動を中心に担い、子どもの成長と社会性の育成、人格形成や人間関係形成支援、子どもの成長に必要な社会常識獲得のため指導をすることであった。

就学前教育機関で働くペダゴーは、子どもの発達段階に合った支援を工夫したり、保育プランも念頭に子どもの能力を最大限に発揮できたりするような指導を行う。また自己肯定感や自分の価値を認識できるような介入を行っていた。

このことからペダゴーは、子どもの発達段階を念頭に社会や将来を意識した指導支援、ソーシャルスキルや心理的な分野の支援に専門性があると考察した。

次に、就学移行の際のペダゴーの専門性としては、子どもの興味関心を一番に考えつつ、国民学校について子どもがイメージできるように指導することや、子どもの心配を軽減するために就学前教育機関での学びを国民学校における学びにつなげるような活動を考えていたことであると推察した。そのためにペダゴーが一人ひとりに対して引継ぎ資料を作成すること、就学前教育機関と国民学校そして学童保育の教職員連携の要として、その全ての機関においてペダゴーが指導者としていることがデンマークのペダゴーの特長であった。

#### 5. 謝辞

本研究は JSPS 科研費 JP18K02793 の助成を受けたものである。

#### 註・引用文献

- 1 横山真貴子(2013)保幼小をつなぐ保育者養成 デンマークの保育・教育の概要『日本発達心理学会第24回大会発表論文集』p.66.
- 2 齋藤正典(2013)保幼小をつなぐ保育者養成 デンマークの保育者(ペダゴー)養成『日本発達心理学会第24回大会発表論文集』p.66.
- 3 小谷正登(2012)デンマークの保育者ペダゴーの専門性に関する一考察—リレベルト大学社会教育学部における養成課程と実践を基に—『臨床教育学論集』武庫川臨床教育学会,5,pp.27-40.
- 4 堀越紀香(2013)保幼小をつなぐ保育者養成 デンマークの0年生『日本発達心理学会第24回大会発表論文集』p.66.
- 5 沢広あや(2004)デンマークにおける子どもケアと校教育の連携について『大阪大学教育学年報』9,pp.149-162.
- 6 石井正子(2010)スウェーデン、デンマークにおける特別なニーズのある子どもの保育—統合保育所及び保育者養成校視察報告—『学苑・初等教育学科紀要』836,pp.63-74.
- 7 櫻谷眞理子(2015)個を大切にするデンマークの保育に学ぶ—自立性と自己決定を重視した実践—『立命館産業社会論集』51(1)pp.67-84.
- 8 Erik Hygum and Peter Moller Pedersen, Early Childhood Education Values and Practices in Denmark, pp.12-15.

- 
- <sup>9</sup> 山浦祐香・是永かな子(2018)デンマークの教員養成およびペダゴギーに関する一考察『高知大学学術研究報告』67,pp.51-64.
- <sup>10</sup> 櫻谷真理子(2015)個を大切にするデンマークの保育に学ぶ—自立性と自己決定を重視した実践—『立命館産業社会論集』51(1)pp.67-84.
- <sup>11</sup> 同上 13.

令和元年 (2019) 11月11日受理

令和元年 (2019) 12月31日発行